

1. 函館要塞の施設配置図



函館要塞跡 散策マップ



函館要塞は明治28年(1895)日清戦争終結後、日露戦争を想定し、津軽海峡の防衛強化を目的に計画されました。

策定にあたっては、明治新政府がフランスから招へいた軍事顧問団が参画し(全国要地の防御計画)、明治30年には築造事務所が設置され道路工事等を開始。翌31年には第7師団の視察を受け、約4年間をかけて砲台が建設されました。

明治32年(1899)に要塞地帯法が制定され、函館山への一般市民の立ち入りは禁止されました。

函館要塞は、敗戦とともに廃止となり、昭和21年(1946)10月に開放されましたが、この間、約半世紀にわたり函館山の自然は人為的に保護されてきたともいえます。

このようなこともあって、今日では約600種の植物が生育し、約150種の野鳥が息息する貴重な自然の宝庫となっており、緑あふれる市民のオアシスとして、また、重要な観光資源としての二面性を持った本市の誇る緑の遺産です。

平成13年に函館山は「函館山と砲台跡」として北海道遺産に選定されています。

	要塞施設の名称	竣工	設備の種類	数	備考
砲戦砲台 (海上面)	① 御殿山第1砲台	明治 33.10	28cm榴弾砲	4門	左翼、右翼観測所 各1 武式
	② 御殿山第2砲台	// 34.2	28cm榴弾砲	6門	左翼、右翼観測所 各1 武式 演習砲台4門、千代岱兵舎へ2門
	③ 千畳敷砲台1	// 34.1	28cm榴弾砲	6門	左翼、右翼観測所 各1 武式 4門格納状態。終戦時は2門
側防砲台 (陸正面)	④ 千畳敷砲台2	// 34.1	15cm臼砲	4門	
	⑤ 薬師山砲台	// 32.10	15cm臼砲	4門	
	⑥ 立待保塁	// 35.10	9cm加農砲	4門	
戦闘司令部 ・低地観測所	⑦ 穴澗照明所、発電所	// 34.12	90cmプレーゲ横置き	各1	昭和3 スペリー式
	⑧ 穴澗低地観測所	// 35.9	武式測遠器	3基	御殿山第2、千畳敷砲台用の2基 追加1基の3基
	⑨ 立待照明所、発電所	// 34.12	90cmプレーゲ横置き	各1	
	⑩ 立待低地観測所	// 36.3	武式測遠器	3基	御殿山第1、第2、千畳敷砲台用の3基
	⑪ 高龍寺山低地観測所	// 35.9	武式測遠器	2基	御殿山第1、第2砲台用の2基
	⑫ 千畳敷戦闘司令部	// 38.12	武式測遠器	1基	観測所、作戦室、電話室ほか
その他	⑬ 水元谷の砲台支援施設	// 35	火薬庫、弾丸庫、食糧庫ほか	11種類、24棟	火薬庫は明治33.12竣工
	⑭ 函館要塞司令部	// 33千代岱に開設 // 36谷地頭に移る			昭和2.4 津軽要塞司令部に変更
海軍施設	⑮ 水雷司令所、海軍衛所	// 37.2	付属観測所設置	各1	高龍寺山(水雷用電らん敷設)
	⑯ 探海灯、発電所(仮)	// 37.2	小型火力発電所	各1	若芽崎(石造堤防)
	⑰ 急造砲台	// 37	7.5cm速射砲	6門	若芽崎(木造付属兵舎)
	⑱ 入江山観測所	不明	応式測遠器	1基	御殿山第2砲台用



2. 函館要塞が築かれた歴史的背景

ロシアの脅威

要塞の建設は明治4年(1871)12月、陸軍大将山県有朋(ヤマガタ アリトモ)などの内地の守備、沿海の防衛についての建議から、明治新政府がフランスから招へいた軍事顧問団が参画して計画が策定されました(全国要地の防衛計画)。明治13年(1880)には東京湾要塞工事が開始され、日清戦争では、東京湾、対馬、下関、由良の各要塞が防衛にあたりました。

明治28年(1895)日清戦争に勝利した日本は、講和条約で領有した遼東(リョウトウ)半島を巡ってロシア・ドイツ・フランスの三国から返還を迫られました(三国干渉)。特に日本にとって脅威だったのは、ウラジオストクに強力な海軍を擁し、沿海州から遼東半島や朝鮮に南下を目論むロシアの存在でした。この当時、ロシアの南下政策はインドにも向かっており、英国と日本の立場を危うくするものであり、日本とロシアの国家的利害の接点である朝鮮半島で、日本はロシアの圧力を食い止める必要がありました。

戦前の日本の要塞分布図



- | | | |
|--------------|-------------|----------|
| ① 宗谷臨時要塞 | ⑦ 芸予要塞 | ⑬ 対馬要塞 |
| ② 函館要塞(津軽要塞) | ⑧ 広島湾要塞 | ⑭ 壱岐要塞 |
| ③ 東京湾要塞 | ⑨ 豊予要塞 | ⑮ 佐世保要塞 |
| ④ 父島要塞 | ⑩ 下関要塞 | ⑯ 長崎要塞 |
| ⑤ 舞鶴要塞 | ⑪ 釜山(鎮海)湾要塞 | ⑰ 中城臨時要塞 |
| ⑥ 由良要塞 | ⑫ 麗水臨時要塞 | ⑱ 船浮臨時要塞 |

要塞の建設

函館山の要塞は、明治28年(1895)の日清戦争終結後に日露戦争を想定し、津軽海峡の防衛強化を目的に建設されました。日清戦争後は鳴門、芸予、呉、佐世保、舞鶴、函館の要塞が建設され、日露戦争ではこれら全国10か所の要塞が防衛にあたりました。

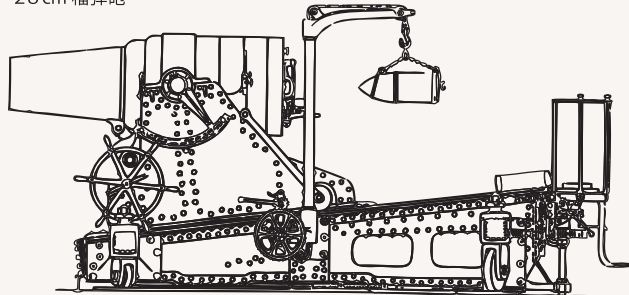
この時期、北海道の開拓事業が軌道に乗り、物資と人の輸送が増大したことから、明治29年(1896)に函館港の改修工事が開始されています。翌30年に築造事務所が設置され、道路工事等を開始、翌31年には本格的に要塞の建設が始まり、約4年間を費やして大小合わせて5か所に砲台が設置されました。

他の多くの要塞が軍港を守ることを目的に建設されたのに対し、函館要塞は純粋に商業港を守るために建設された要塞でした。

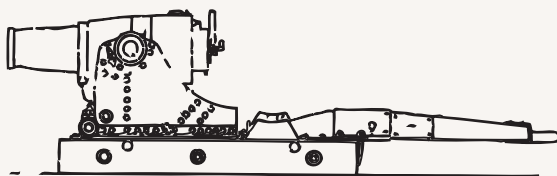
日露戦争当時、ロシア艦隊が津軽海峡等で日本の船舶に損害を与えていますが、要塞の備砲(ビホウ)の射程圏外であったため、一発も発射されませんでした。要塞の存在によって函館港は攻撃されませんでした。

函館要塞建設直後の明治32年(1899)に要塞地帯法が制定され、昭和21年(1946)に開放されるまでの47年間にわたり函館山の一般市民の立入りは禁止されました。

28cm 榴弾砲



15cm 白砲



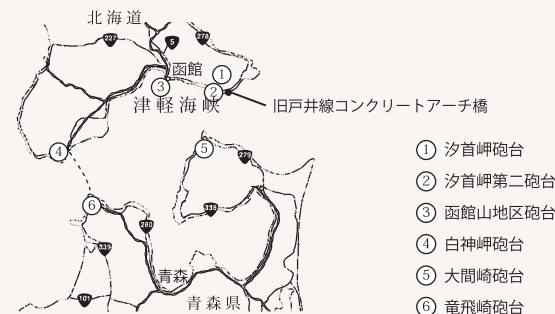
3. 函館要塞から津軽要塞へ

津軽海峡の防衛

函館要塞は、明治42年(1909)策定の「要塞整理案」で備砲の撤去が進み、要塞再整理案が裁可された大正8年(1919)には28cm榴弾砲(リュウダンホウ)12門(うち6門は演習用)、15cm白砲(キュウホウ)4門、9cm加農砲(カノウホウ)4門となっていました。一方、津軽海峡と日本海航路の重要性は、明治期に比べ飛躍的に高まっていました。石炭と木材に代表される天然資源、そして室蘭を中心とした製鉄です。

大正11年(1922)の国防方針により、陸海軍とも米国を仮想敵国としたことで、津軽海峡の重要性は飛躍的に高まりました。海空の攻撃から函館と青森の両港を守り、津軽海峡における敵艦隊の通航を阻止する目的を持った新たな要塞の建設が始まりました。海峡封鎖のための砲台建設は、大正13年(1924)、大間崎に戦艦「伊吹(イブキ)」の艦砲を転用した砲台の工事が着手されたのが最初でした。この砲台建設中の昭和2年(1927)に津軽要塞が発足し、函館要塞はこれに編合されます。こうして津軽要塞は昭和15年(1940)に完成しました。昭和16年(1941)に太平洋戦争が始まりましたが、要塞施設が旧式で実戦に役立たないことから、昭和20年(1945)4月、高龍寺山に陸海軍の観測所、高射陣地を設けました。7月の米軍空襲時には、これらの高射砲が果敢に火を噴き米軍機1機を撃墜しています。

津軽要塞砲台配置図



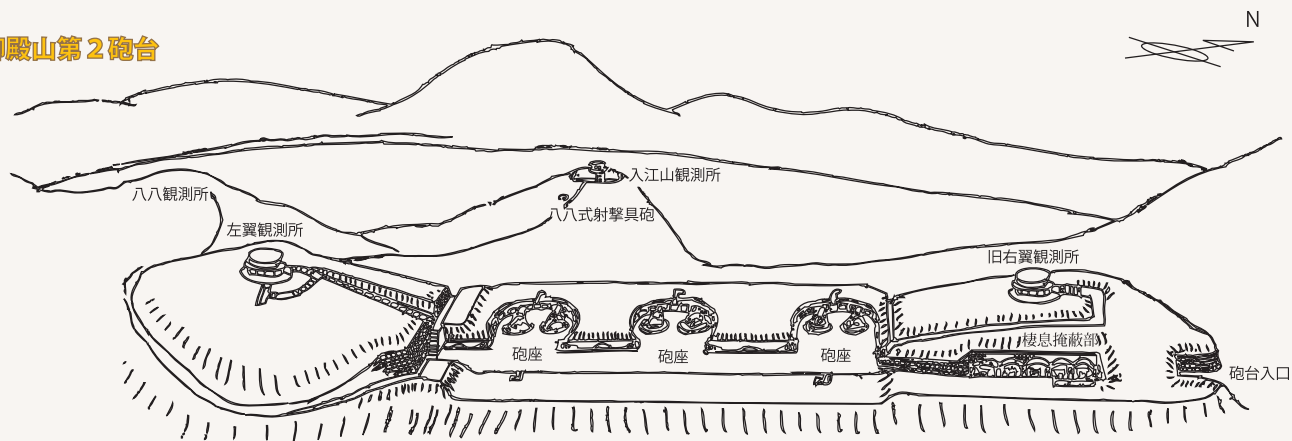
旧戸井線コンクリートアーチ橋



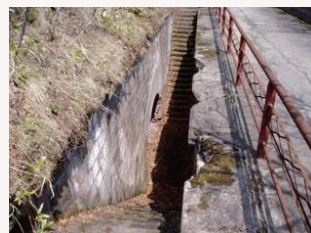
旧戸井線は、汐首岬の砲台への兵員物資の輸送のため昭和11年(1936)に着工。しかし戦局の悪化と資材不足から、昭和18年(1943)に全線29.2キロ中、2.8キロを残して工事を中断しており、そのまま敗戦を迎え未成線となりました。

4-1. 主な要塞施設の復元鳥かん図

御殿山第2砲台



左翼観測所跡から見た御殿山第2砲台の眺め

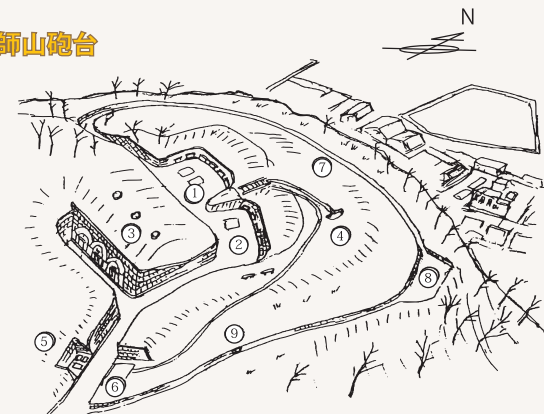


砲側庫に続く階段



28cm榴弾砲 砲座跡

薬師山砲台



- ① 第1砲座 15cm白砲
- ② 第2砲座 15cm白砲
- ③ 砲具庫 (棲息掩蔽部)
- ④ 白砲座 見張所
- ⑤ ろ過槽、貯水槽
- ⑥ 監守衛舎
- ⑦ 塹壕連絡路
- ⑧ 見張塚
- ⑨ 連絡路排水口



砲具庫跡 (棲息掩蔽部)



15cm白砲 砲座跡

入江山観測所跡平面図



入江山観測所跡から見た函館湾の眺め



八八式海岸射撃具砲座跡



入江山観測所跡内部

Q. 砲座から海が見えないのはどうして？

砲台を見学するとわかるのですが、砲座からは海が見えません。

どうやって射撃することができたのでしょうか。

これは、砲台を航行する艦船から隠すためで、砲座の両翼にある観測所が目標物との距離・速度や砲弾の着弾点を観測しながら弾道計算をしました。

各砲座は、観測所から伝えられる数値を基に、方位や仰角を合わせて射撃を行ないました。

また、各砲座に設置されていた28cm榴弾砲や15cm白砲は曲射砲の一種で、打ち出された砲弾は上空に高く上がり、放物線を描いて落下するため、目標と砲座との間に遮へい物があっても、射撃することが可能でした。

4-2. 主な要塞施設の復元鳥かん図

千畳敷砲台



- | | | | |
|------------------|-----------------|------------|-------|
| ① 弾 廠 | ⑥ 棲息遮蔽部 (取壊し) | ⑪ 砲側庫 | ⑮ 見張壕 |
| ② 千畳敷右翼観測所 | ⑦ ろ過水槽および貯水槽 | ⑫ 白砲見張所 | |
| ③ 第1砲台 28cm 榴弾砲座 | ⑧ 大便器 8基、小便所 | ⑬ 戦闘司令所見張所 | |
| ④ 地下遮蔽壕 (砲台長室) | ⑨ 千畳敷左翼観測所 | ⑭ 戦闘司令所 | |
| ⑤ 地下砲側庫 (取壊し) | ⑩ 第2砲台 15cm 白砲座 | ⑮ 貯水槽、ろ過槽 | |

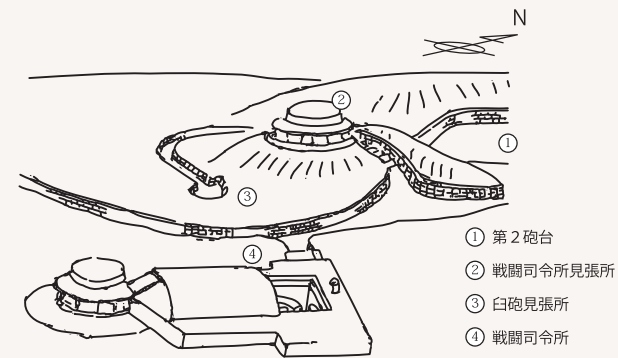


15cm 白砲 砲座跡



ろ過水槽および貯水槽跡

千畳敷戦闘司令所 (抜すい)



- ① 第2砲台
- ② 戦闘司令所見張所
- ③ 白砲見張所
- ④ 戦闘司令所



戦闘司令所跡



戦闘司令所内部 電話室 4連×2

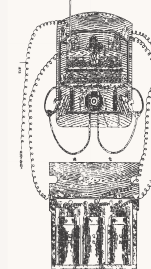
5. 函館要塞略年表

明治 27 年 (1894) 日清戦争始まる、翌 28 年終結	大正 5 年 (1916) 御殿山第 1 砲台、薬師山砲台除籍 (千畳敷砲台だけ機能)
明治 30 年 (1897) 陸軍築城部の函館要塞築城事務所開設。函館要塞建設開始 (仮想敵国はウラジオストクのロシア艦隊)	大正 8 年 (1919) 要塞整理要領決定 (津軽海峡東西両口に 30cm 榴弾砲新設)
明治 32 年 (1899) 要塞地帯法制定 (函館山への立入り禁止、10 キロメートル以内の撮影等禁止)	大正 11 年 (1922) ワシントン軍縮会議。国防方針の再改訂 (仮想敵国を米国とする)
明治 33 年 (1900) 函館要塞司令部設置	大正 12 年 (1923) 要塞再整理要領決定 (津軽海峡東口を重視)
明治 35 年 (1902) 日英同盟締結。函館要塞完成 (総築城費 80 万円余、最初に薬師山砲台完成、最後は立待岬保塁。対艦用 28cm 榴弾砲 16 門、陸用 15cm 白砲 8 門、9 cm 加農砲 4 門)	昭和 2 年 (1927) 津軽要塞発足、津軽海峡封鎖 (津軽要塞司令部に改称)
明治 37 年 (1904) 日露国交断絶。対露宣戦布告。青森県深浦沖でウラジオ艦隊による日本商船攻撃。長崎・佐世保・対馬・函館に戒厳令施行。ウラジオ艦隊津軽海峡に侵入、反転し再び津軽海峡を通過、日本海に入る。日本軍 203 高地占領。	昭和 12 年 (1937) 日中戦争始まる。鉄道戸井線着工 (同 18 年工事中止)
明治 38 年 (1905) 日本海海戦。日露講和条約締結。函館の戒厳令解除	昭和 14 年 (1939) 第二次世界大戦勃発
明治 41 年 (1908) 青函航路開業	昭和 15 年 (1940) 津軽要塞完成 (青森県大間崎・竜飛崎、北海道汐首岬・白神岬) 日独伊三国同盟成立
大正 3 年 (1914) 7 月第一次世界大戦勃発。同 7 年 11 月終結。	昭和 16 年 (1941) 日本海軍機動部隊ハワイ真珠湾攻撃 (12 月 8 日)
	昭和 19 年 (1944) 28cm 榴弾砲が津軽海峡の敵潜水艦に初めて実戦発砲
	昭和 20 年 (1945) 米軍沖繩上陸。米第 3 艦隊による青函航路攻撃 (青函連絡船 12 隻のうち 10 隻沈没・2 隻損傷、その他石炭輸送船 1 隻沈没)。広島・長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾。無条件降伏。
	昭和 21 年 (1946) 函館山を一般開放

戦闘司令所と付属見張所は、明治 38 年 (1905) に竣工しました。これにより、白砲 (キュウホウ) 見張所は遮られて観測不能となったため、付属見張所が代行することになりました。

なお、ここでは函館要塞全体の指揮所として、連絡手段に電話、回光 (発火) 通信が用いられていました。

ゴウア式電話器



発行：函館市観光コンベンション部
協力：函館産業遺産研究会

平成 21 年 11 月発行